

まずは専門医に 相談を

不妊治療はいま



熊本大学医学部附属病院産科・婦人科
教授 片瀨 秀隆

不妊症の原因

健康な男女が妊娠を希望し、避妊をせず夫婦生活を営むと一定期間内に大多数の方が妊娠されますが、一定期間を過ぎても妊娠しない場合、不妊症と診断します。一般的に、年齢が高い夫婦では妊娠できない期間(これを「不妊期間」といいます)が短くても、それ以降自然妊娠する可能性は低く、年齢が若い夫婦では不妊期間がある程度長くても、その後自然妊娠する可能性は高いことが知られています。この「一定期間」に関しては、世界保健機構(WHO)では、不妊症は2年間の不妊期間をもつものと定義しています。しかし、妊娠を考える夫婦の年齢が比較的高い米国の生殖医学会では、不妊期間1年以上を不妊症とすることを提唱しており、結婚年齢が高くなった日本でも1年以上妊娠しない場合に不妊症と診断し、検査と治療を開始したほうがよいという考えが一般化してきています。不妊症の原因は女性側、男性側、あるいはその両方の原因に分けられます(図1、図2)。WHOが発表した不妊症の原因に関する統計では、41%が女性側、24%が女性・男性の両者、24%が男性側、11%が原因不明、と報告されています。女性の不妊症の原因には、排卵因子、卵管因子、子宮因子、頸管因子、免疫因子などがあります。このうち排卵因子と卵管因子、そして男性因子を加えた3つは特に頻度が高く、不妊症の3大原因と言われています。また最近では、子宮内膜症による不妊症も増加しています。

不妊症の治療

排卵と受精を補助する方法には、タイミング法、排卵誘発法、人工授精、そして体外受精などの生殖補助医療(ART)があります。(図3)また、腹腔鏡検査は、タイミング法、排卵誘発法、人工授精などの一般の不妊治療で妊娠されなかった女性に対して行われ、子宮内膜症などの病気が見つかることがあり、検査と同時に治療を行えるメリットがあります。(図3)

タイミング法は、排卵日を予測して性交のタイミングを合わせる治療です。排卵誘発法は、内服薬や注射で卵巣を刺激して排卵をおこさせる方法です。通常、排卵のない女性に排卵をおこすために使われますが、人工授精の妊娠率を高めるためや、体外受精などの生殖補助医療の際にも使われることがあります。人工授精は、用手的に採取した精液から運動している成熟精子だけを洗浄・回収して、排卵の時期に細いチューブで子宮内に注入して妊娠を試みる方法です。生殖補助医療には、体外受精と顕微授精がありますが、いずれも経腔的に卵巣から卵子を取り出して(採卵)、体外で精子と受精させ、数日後に受精卵を子宮内に返します(胚移植)。

不妊の原因は一つとは限らず、年齢が一定以上になった場合には精子や卵子の力が低下するという原因が重なって来ることもあります。このようなことから、卵子や精子の力が低下していることが疑われる場合、順を追った治療を切り上げて、早期に体外受精を考える場合もあります。

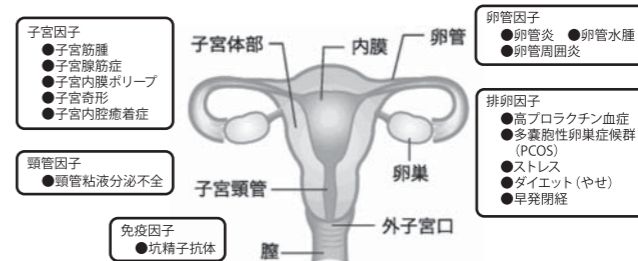


図1 女性側の不妊原因

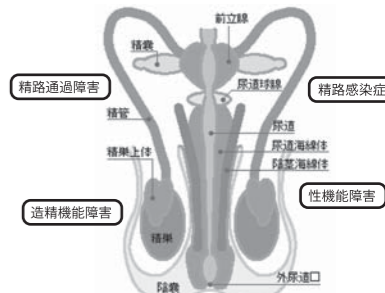


図2 男性側の不妊原因

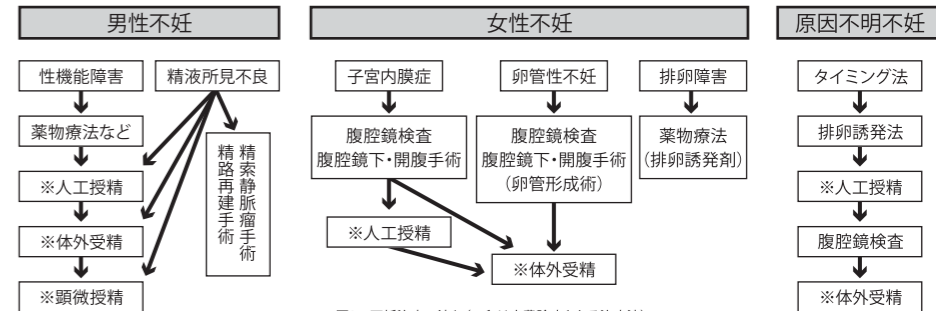


図3 不妊治療の流れ(*印は自費診療となる治療法)